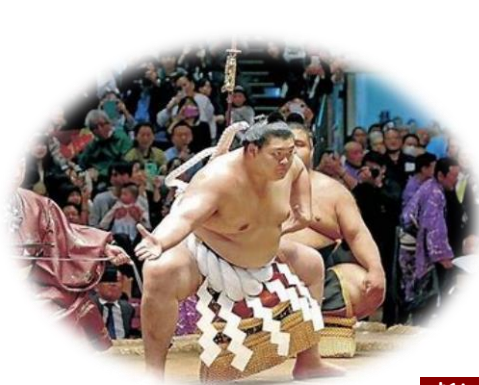




令和 7 (2025) 年 6 月 12 日



校長だより Vol.3

新しい風が吹いた ～師弟の強い絆が起こした不易流行～

5月28日(水)日本相撲協会は、臨時の理事会において、大相撲夏場所2場所連続4回目の優勝を果たした大関・大の里の横綱昇進を正式に決め、第75代横綱・大の里が誕生しました。大の里は昇進を伝える使者を迎えた伝達式の口上で、「横綱の地位を汚さぬよう稽古に精進し、唯一無二の横綱を目指します」と決意を述べました。

大の里は石川県津幡町出身の24歳。おとし5月の夏場所幕下10枚目格付け出しとして初土俵を踏みしました。**初土俵から所要13場所での横綱昇進は横綱が番付上の地位として明文化された明治42年以降、最も速い記録です。**

また、日本出身横綱の誕生は元横綱・稀勢の里の二所ノ関親方が平成29年の初場所後に昇進して以来、8年ぶりです。会見に同席した師匠で元横綱・稀勢の里の二所ノ関親方は自身の横綱昇進と弟子の昇進の違いを問われると「僕は一番遅く(初土俵から89場所)上がって、大の里は一番速く上がったのでその違いはある。つい最近、大関に上がったばかりだが僕の場合は大関に5年いましたから僕の場合と違うものがある」と話しました。大の里の横綱昇進については「入門してからしっかり体づくりをして地道にやり続けてきた稽古が少しずつ身になってきたと思う。つまらないような稽古を一番やってきたのが大の里なので、稽古は嘘をつかないというのがはっきり出た」と評価しました。その上で「一番上の番付に上がったが、まだまだ成長途中でこれからまた稽古を積んでまだまだ強くなると思うのでしっかり指導していきたい。背中で引っ張っていくぐらいの力士になってほしいし、大相撲全体を盛り上げる存在になってほしい」と期待を寄せました。

さて、なぜ唐突に相撲の話になったのかと申しますと、昨年度(令和6年度)に開催された全国PTA連合会大会(茨城県)において、私も含めて全国各地から集まった校長やPTA会長等が、大会の目玉として企画された記念講演で、二所ノ関親方による『人材育成の不易流行』を拝聴していたからです。無礼を承知で申し上げれば、元横綱とはいえ、一体どんなお話をしていただけるのか半信半疑でしたが、そんな愚かな思いを一蹴するような実体験と科学的根拠に裏打ちされた素晴らしい講演内容でした。御存じの方が多いと思いますが、相撲の世界は早朝からの稽古に始まり、稽古を終えると、番付上位の力士から風呂に入りお昼ごはんを食べます。いわゆる一日二食が有名です。「雑魚寝」という言葉があるように、幕下の力士たちの多くは大部屋で生活を共にします。現役時代は闘志あふれる相撲で多くの人を魅了してきた二所ノ関親方ですが、ケガが多かった自身の相撲人生を振り返り、なんと引退後はすぐに親方にはならず、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科の平田竹男教授のゼミに「入門」します。これまで角界(相撲の社会)では常識とされていたことにも、**大学院での学びを大いに活かして改革(新風)を吹かせます。相撲の聖地である両国国技館周辺にはあえて相撲部屋を構えず、故郷茨城県(阿見町)に二所ノ関部屋を開き、力士には個室を与え、一日三食や休養日の設定等、栄養学やケガ防止を含めた科学的根拠に基づいたトレーニングを励行。土俵は一面という常識も覆し二面土俵を採用するなど、合理的な手法で稽古の効率性を飛躍的に改善しました。**

PTA連合大会の講演では、「大の里はいずれ横綱になります。」という力強い言葉通り、大関昇進から一年にも満たない間に、公言通りに横綱に昇り詰めました。大の里は、学生時代(日体大)までに、アマ横綱など13冠を獲得し、勧誘された多くの部屋を体験入門に回中、二所ノ関親方に質問すると「**1聞いたら5とか10返ってきた。この親方の元で学びたい。**」と入門を決意したそうです。盤石の師弟の絆で二人三脚で精進してきたわけですから、当然と言えばそれまでですが、あの時に拝聴した親方の改革への熱い思いが見事に結実していることに、改めて大きな感銘を受けました。変わりにくいと考えられる角界(相撲に関する社会領域)で確実に「新しく力強い風」が吹いたのです。

『価値観は変わる、でも…。』 (周りにいる人で 物的条件で 時代の流れで…)

テレビが一家に一台しかない時代。チャンネル権は父親にあるのが普通で、観る番組といえば、父親が好むプロ野球や大相撲とニュース(たまに歌番組)であり、唯一の娯楽を共有した子どもが学校で友達と話題にすることはといえば、大体似通わざるをえませんでした。

電話は一家に一台が当たり前。『ジリリリン～リン』とベルが鳴れば、必ず親に干渉されるので、プライベートなんてありません。どこの家庭もそんな感じだった風景が、突然目まぐるしい速さで変わってしまいました。ダイヤル式の黒電話がプッシュフォンになり、留守番電話機能が付いたというのは喜び、ポケベルの暗号にへえ～と唸り、折り畳み式の携帯電話を得意げにパチンと開いて喜んでいたら、誰もが当たり前にスマホを持つようになりました。

ひと月の小遣い3,000円が一般的だった時代に高校生だった私が、『みんな持っているから…。』という理由で、10万円を超えるような電話機能付きの小型パソコン(いわば高級品)を、まだ就労体験さえない未成年の息子や娘に買い与える側になるなんて、露ほども予想できませんでした。もちろん毎月の通信料も自動的に親が支払うなんて…。(涙)

『我が家は他所とは違う!』なんて頑な姿勢を貫こうとすれば、子供が肩身を狭くするだろうし、世間体が気になる時代です。かくいう私も、3人の子どもたちに、高校入学のお祝いとして携帯電話を買い与えました(涙)

「無ければ無いなりに」というような感覚や価値観は、いつしか「みんなが持っているから…」が当たり前になりました。ハイテクノロジーの進化により、豊かな暮らしを享受できていることには感謝しかありません。しかしながら、そんな中だからこそ、語り継ぐべき「不易と流行」は、語らなくなってしまうと、伝わることもないんだと思いました。



「ともえ祭」を終えて

6月7日(土)一般公開、10日(火)ステージ発表(清水マリナート)の二日間で令和7年度「ともえ祭」が開催されました。本年度のテーマは『輝(ひかり)~with a smile in my heart~』でした。準備期間は決して潤沢ではなかったと思いますが、生徒会の生徒中心に精力的に動き、各クラスもそれぞれに趣向を凝らしていました。

1日目(6/7 一般公開)

新しい校舎での一般公開もありましたが、昨年度と比べてどうだったでしょうか。体育館では箏曲・演劇・合唱・ダンスの発表がありました。館内はかなり暑くなりましたが、御来場のみなさまからは温かく大きな拍手をいただきました。各クラス各団体が精一杯の『おもてなし』でお客様をお迎えし、自分たちも充実した一般公開だったと思います。とはいえ、西高の「ともえ祭」のさらなるグレードアップを目指して、客観的にキチンとふりかえりましょう。

2日目(6/10 ステージ発表)

清水マリナートに会場を移してステージ発表となりました。7日(土)に続き、箏曲部・演劇部・合唱部・ダンス部の発表です。生徒会の生徒が趣向を凝らしたオープニング映像から始まり、箏曲部の演奏、演劇部はたった一人で頑張った森本菜々海さん(34HR)。「梅の実落ちても見もしまい」、思いがしっかり伝わる見事な千秋楽でした。合唱部は、爽やかな男女のハーモニーと可愛らしい振り付けで青春の様々な情景を表現し、ダンス部は、豊富なバリエーション、構成力、躍動感で観客を魅了しました。お世辞などではなく、県内トップレベルの内容を観(魅)させていただいたと感じています。文化部のみなさんはもちろん、西高の誇りとして感じてほしい、素晴らしいステージ発表でした。

『同じ星を見て歩いていきましょう!』①

未だに諸外国に比して低い傾向が続いているといわれる **「自己肯定感」** と **「自己有用感」**。前者は、自分自身をありのまま肯定し、価値ある存在と認める感覚のことで、後者は、自分が誰かの役に立っている、貢献していると感じる感覚を指します。要するに、上手いかわない時の自分がいてもいい。自分はあてにされている。と感じられるかどうかだと思います。

「ともえ祭」を終えて、西高は、『もっと良くなれる』『まだまだ進化できる』可能性に溢れた学校だと確信しました。生徒は、素直で真面目、感じの良い生徒が多いと思います。もちろん、それは日々の学校生活で懇切丁寧に関わっていただいている先生方のお陰に他なりません。

では、どうしたら低いと指摘される **「自己肯定感」** と **「自己有用感」** を高めることができるのでしょうか。

人は「褒めてほしい時に褒められたい」生き物だと思います。

反対に、「こんなタイミングで褒められたくない」もあります。ですから、タイミングは重要な要素です。まずは、よく見ること。一人一人をよく観察することです。そうしないと、「今だ!」を見逃してしまいます。また、間違った意見(答え)を発することがあっても、安心して(嘲笑されることがない)居場所がある。人が話している時には、傾聴することを徹底するなどの環境整備(ルールの明示等)がとても重要です。

生徒が勇気を出してアイデアを提案しやすい環境を整えることは、すなわち、成功までのプロセス(過程)での失敗に寄り添い、それをしっかりと受け止めて育てられる心理的安全性が高い学校だということです。

西高は、**「自己肯定感」** と **「自己有用感」** を高めることができる学校だと、私たち教員が強く認識するべきです。

生徒の発想の中には、『おお~!!』と唸るものもあれば、『えええ~!!』もあると思います。

ですが、その中でも、サポートしてあげれば、実現可能な面白いアイデアが結構出てくると思います。

要は、「言っても(相談しても)ムダ」ではなく、頑張れば、「自分のアイデアが学校を動かすことができた。」

「学校を変えることに繋がった。」という経験を、できるだけ多くさせたい。それが、やがては社会を変えることができる人材を育成することに繋がると考えるからです。

西高の良いところは、怒号が鳴り響くことがないのはもちろん、「面倒見が良い」「親切」な先生方ばかりだということです。多くの生徒が先生方を信頼している様子が伝わってきます。だからこそ、大きなチャンスだと思います。

転ばぬ先の杖を突いてしまった方が間違いは少ないですが、生徒は育ち(成長)しません。

転ぶことを計算に入れておき、そこから這い上がる経験をたくさん積みませましょう。根気が要る作業ですが、自治力(底力)を上げるには必要です。私たち教員がまずはそこを、**西高の『売り』**だと認識していきましょう。

「失敗には種類がある。」という話は、一学期始業式でお話ししたとおりです。(学校HPにも掲載してあります。)

失敗することを避けたり、大した準備もせずと同じような失敗をすることに寄り添うということではなく、心血を注いで周到に準備したことさえ失敗することがあることを学び、チャレンジし続ける(進化を止めない)タフな生徒を育てていきましょう。

次号では、「未来志向」「フィードフォワード」「バックキャスト」について書きたいと思います。

